

全道医家囲碁大会

名人戦は樋口栄作 6 段格が 2 度目の優勝！

本因坊戦は仲 3 段が 2 度目の優勝！

第40回全道医家囲碁大会を終えて



全道医家囲碁連盟
常任幹事 石川 順一

アジアのスポーツの祭典であるアジア大会に、囲碁がマインドスポーツとして前回（2010年）から競技種目に採用されました。男女ペア、男子、女子の3つの団体競技が行われ、韓国が金メダル3個、中国が銀メダル3個、日本、台湾、韓国が銅メダル各1個という結果でした。わが国は、かつては世界の強さを誇っていましたが、最近では3～4番目の国になってしまいました。主たる原因は、囲碁人口の減少、特に若者の囲碁離れです。

全道医家囲碁大会は、今回で40回の節目を迎えました。残念ながら参加者の減少は続いております。平成25年11月17日（日）に札幌市医師会館にて名人戦（オール互先）14名、本因坊戦（ハンディあり）9名の計23名（前回はそれぞれ16名、11名の計27名）が参加して、4回戦方式で熱い戦いが繰り広げられました。

名人戦は、優勝回数最多の樋口晶文先生（札幌市）が体調を崩され不参加で、優勝争いは混とんとするかに見えてましたが、参加者が14名のため過去3回の大会での上位者のうちポイントの高い樋口栄作先生（札幌市）、岡村廉晴先生（恵庭市）の2名がシードされ、お二人とも順当に勝ち進み、決勝戦で戦われ樋口栄作先生が優勝されました。

本因坊戦は、3勝どうしの決勝で仲俊之先生（3段・旭川市）が武田圭佐先生（4段・札幌市）に勝たれ優勝されました。

大会の対局は、持ち時間各45分で、使い果たしたら即負けというルールです。時間を気にしながら、頭や手を使わなければならない競技ですので、のどは乾きますし、気力、体力も必要で、打ち終わると、ドット疲れます。正にスポーツと言って良いかと思

います。

スポーツのあとの一杯は最高です。対局のあとは懇親会です。三宅直樹囲碁連盟会長の挨拶のあと和気藹々の懇親のさなか、名人戦、本因坊戦の表彰式が始まり、会長から受賞者に賞状、トロフィ、副賞が渡されました。あとは受賞できなかった人たちに、次回は頑張りましょうとの意味も含め抽選でラッキー賞が贈られ大いに盛り上がりました。

その後は、恒例の上村収蔵プロによる名人戦決勝戦の大盤解説で優勝者の強さを思い知り、次回こそはと思いながら、散会となりました。

囲碁は、アジア大会にも採用されている競技ですし、是非次回は、多数の医師の皆様が参加して下さるよう切にお願いいたします。

第40回名人戦優勝記



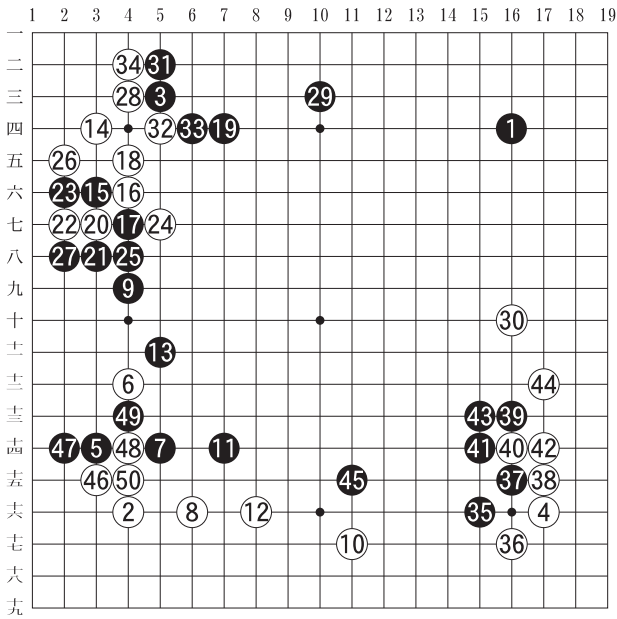
札幌市医師会
ひぐち耳鼻咽喉科
樋口 栄作

この度、節目の第40回全道医家囲碁大会名人戦に優勝することができ、大変うれしく思います。初出場の第37回大会で、運良く優勝した後は、準優勝、ベスト4、初戦敗退と、成績が下降していたため、今大会にける意気込みは相当なものがありました。1回戦がシードとなり、2回戦からの対局でしたが、菊地一也先生、坪俊輔先生、そして決勝戦の岡村廉晴先生と、どれも激しい戦いの碁で際どい勝負になりましたが、優勝することができたのは幸運でした。以下は決勝戦の解説です。

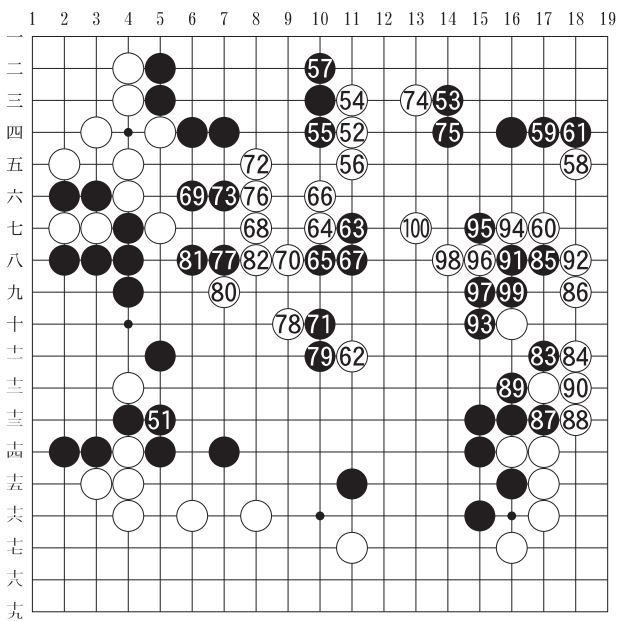
<第1譜> 1-50

黒番の私は、黒3と珍しく目外しに構えました。白2の星に黒5と小桂馬掛かりしたのに対し、白6と厳しく一間に挟んできました。黒7と一つ飛んでから黒9と白6を挟んだとき、白10と中国流に構え

第1譜 1-50 黒：樋口、白：岡村



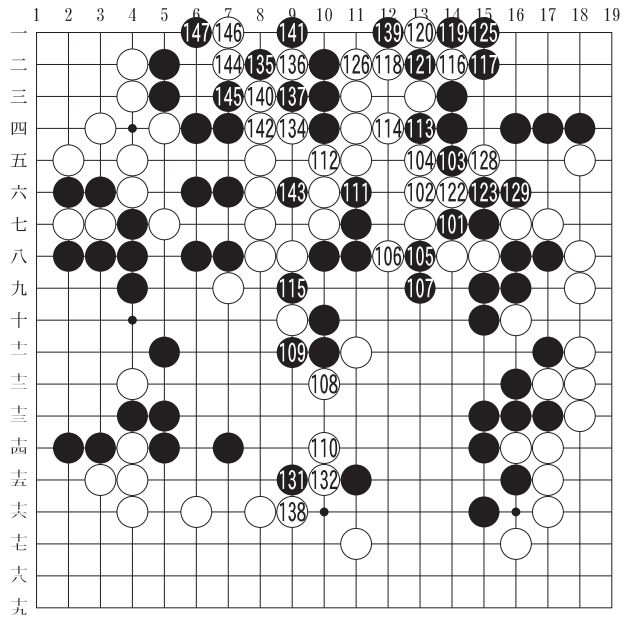
第2譜 51-100



てくれたため、さらに黒11と飛びを利かしてから黒13と掛けに回れたのはありがたかったです。白10では、審判と務めていただいた上村収蔵地方棋士から指摘のあった、5の十三にコスミ付けされていると厄介でした。白6は動かずに白14と目外しに掛かりに対し、黒15と挟んで左辺の厚みが生きてきました。しかし、白16のツケに黒17とハネたのは軽率でした。白18と引かれて、白20の切りと、6の四の黒3への掛けを見合いにされました。ここは冷静に3の七に引くべきでした。黒19と上辺に開いた代償として、白20の切りから締め付けを受けて、白34まで上手く左上隅をさばかれてしまいました。先手が回ってきたので、黒35と白模様の右下隅に掛かりました。ここで白36とコスンで、根拠を奪ってきましたが、黒

第3譜 101-147

白124(14-ニ コウトリ)黒127(13-ニ コウトリ)
白130(14-ニ コウトリ)黒133(131-ニ コウトリ)



37から黒45まで幸便に白模様を上手く消すことができました。

<第2譜>51-100

これに対し、白は52と肩つきですが、17の三への三々入りが見え見えだったので、直接挨拶をしないで、黒53と小桂馬締めりで応じました。その後黒は57と下がったのが消極的だったかもしれません。白58以下右辺を先手で切り上げた白は、根拠のない右下の黒一団を睨んで、白62と中央に構えました。次に11の十三を伺って良い見当です。白の面白い形勢です。黒63は勝負手です。これに対し、白64以下動いてくれたのはありがたかったです。上辺の黒は、根拠がしっかりしているため、白を左辺の黒の厚みの方に追いかけてながら、自然と中央を厚くすることができました。特に、苦し紛れに白78と付けたため、黒は79と中央で桂馬の突き出しを打つことができ、折角の白62が腐ってしまいました。すっかり中央が厚くなり、この時点で黒の面白い形勢です。白82まで窮屈に収まりを図ったところで先手を得た黒は、黒83以下かねてからの狙いの右辺の白の薄みに手を付けて行きました。白を低位に押し付けてから、黒93と白30に上付けして白の中央進出を止めたのに対し、白94の押しから黒95の抑えに対し白96と切ってきました。ここで黒はダメ詰まりで味は悪いのですが、黒97黒99と当ててつづのが強手で、黒95の種石を白はどうしても取ることが出来ません。上辺の白の大石がまだ生きていないため、白はこの戦いで頑張り切れないのです。

＜第3譜＞101-147

黒101と当て込んで、白96と98の二子の分断に成功し、中央に大きな黒の地模様が出現し、尚も眼形の乏しい上辺の白の大石を睨んでいます。この時点で優勢を意識しました。しかし、白は108、110と上辺の大石を放置して勝負手を打ってきました。これに対し、黒は111以下、白の大石の取りかけに行き、コウ含みの戦いになったものの、何とか大石を仕留めることができました。白138は勝負手でしたが、黒139とコウを解消し、白の大石には生きがありません。途中、白134には注意が必要で、黒135と飛ぶのが上手い手で上辺を凌いでいます。黒147のこすみを見て、白の投了となしました。

本大会では、全道医家囲碁連盟の皆様方には、大変お世話になりました。ありがとうございます。今年の第41回大会も、さらに良い内容の碁が打てるよう頑張りたいと思います。

第40回本因坊戦優勝記

旭川市医師会
森山病院

仲 俊之



北海道医師会の囲碁大会に初めて出場させていただいたのは、平成14年のことでした。今回2度目の優勝をさせていただき大変うれしく思います。

私が碁を覚えたのは中学1年のときでした。それまでは、むしろ小学校のとき教室で流行っていた将

棋に興味がありました。友人に碁のルールを教わり、代わりに私とその友人に将棋を教えたのがきっかけです。札幌オリンピックで賑わう当時、狸小路3丁目にあった茶屋碁盤店で一番安い（プラスチック製の）碁石を買って来て、ベニヤ板にサインペンで線を引いて碁盤としたのが始まりです。見かねたのか父（平成24年他界）が折りたたみ式の碁盤を買ってくれました。

父は大学卒業頃に碁を覚えたようで、土木現業所の現場勤務時代には家に碁石と碁盤がありました。しかし、幼少時の私は、碁石をおはじき代わりにして遊んでいたようです。父には最初井目から教わりました。高校入学前後頃でしょうか、互い先で初めて勝った時の悔しいような、嬉しいような父の顔は今でも忘れられません。当時は3級位だったと思われます。大学に入り初めて碁会所（旭川囲碁サロン）に行くようになったのでした。

今回の全道医家囲碁大会、1回戦は同じ旭川の高畑勝彦先生と当たりました。序盤で弱石を二つかかえ絡み攻めにあい、大石の半分を取られてしまいました。この時点で投了を覚悟しておりましたが、見損じて相手の大石が欠け目となり、辛くも勝たせていただきました。一番苦しかった初戦に勝った勢いで2回戦、島功二先生、3回戦、上田晃先生、4回戦、武田圭佐先生と、いずれも本大会の優勝、上位入賞経験者に勝たせていただくことができましたのは、幸運以外のなにものでもありません。

囲碁は、あらゆる世代の人で楽しめるすばらしいゲームです。その教えの中には人生や実生活にも役立つものが多く含まれているように感じます。微力ではございますが今後も精進を続けたいと思います。全道医家囲碁大会の今後ますますの発展を願ってやみません。

第40回大会成績表

(敬称略)

【名人戦】

順位	氏名	得点
優勝	樋口栄作	34
準優勝	岡村廉晴	27
第1位	坪俊輔	26
第2位	菊地一也	25
第3位	高橋成夫	24

【本因坊戦】

順位	氏名	得点
優勝	仲俊之	34
準優勝	武田圭佐	27
第1位	古市武正	24
第2位	新井三郎	19
第3位	上田晃	17